九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

―コミュナル・セクトにおける社会化について

坂井, 信生

https://doi.org/10.15017/2328575

出版情報：哲學年報. 43, pp.25-53, 1984-02-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

―コミュナル・セクトにおける社会化について

坂 井 信 生

はじめに

かつて，われわれはウィルソン（Bryan R. Wilson）のセクト類型論を手がかりにコミュナル・セクトの特質を規定した。それを簡要に表現すれば，一つには，世俗世界に対する反応において，世界を原罪に染った悪そのものとみなし，それに対して無関心ないし逃避することにより救済を求め，今一つは，私有財産制を否定し，生産と消費の両経済生活を共有にする，いわゆるコミュナル・ライフの実践に特徴をもつセクトであった。この意味で，このセクトにはウイルソンの類型での内省主義的セクト（introversionist sect）とユートピア的セクト（utopian sect）との間にそれぞれ類縁性をみることができるのであった。[1]

ところで，コミュナル・セクトがかかる特質を具有するものであるがゆえに，それが歴史的現実の場で具体的形態をとって存在し，かつ存続していくためには，克服さるべき困難な課題がつねに横たわっている。コミュナル・ライフを実践するには，まったく新規なかたちで，日常生活の些細な項目にいたるまでの生活様式の再編成が試みられ，社会活動の規範と社会関係の構造が確立されなければならない。さらに，そのセクトの経済的自立体制の確立，それが立地する地理的社会的条件もまた主要な課題となるが，何よりも新しいメンバーの補充がコミュナル・セクト存続にとり不可避の課題といわなくてはならないであろう。特定の生活活動のパターンの持続は死亡ないし離脱するメンバー

の補充を当然要求する。共同体の規模や年齢構造における変化は，宗教的側面でもまた経済的側面でも，遂行さるべき責務に重大な支障を招来する可能性をもち，新メンバーの獲得能力に欠けるセクトは，それが長期にわたって存続を果しえないことをも意味するからである。

とりわけ，私的に所有する財産の一切を放棄し，時として社会的地位も名誉も棄却してのコミュナル・セクトへの加入は，よほど堅固な信仰的決断を必要とすると考えられる。強烈なカリスマ的創唱者の存命中には，このような信仰的決断による加入者が続出しえたとしても，創唱者の死を契機に加入者は激減し，急速に衰退の一路をたどる傾向はよくみられる。バイゼル（Conrad Beissel）のエフラタ共同体（Ephrata Community），ラップ（George Rapp）のハーモニー・ソサエティ（Hormony Society）などはその好例である。同時に，独身主義の採用も，たしかにセクトそれ自体に対する忠誠は強化されうるとしても，セクト内部からのメンバー補充を不可能にしている。独身主義を実践したシェイカーズ（Shakers）のごときは，メンバー補充に大量の孤児の導入をすら行ったのであるが，10名に1名がやっと残るという有様であったと伝えられている。[8]

このようにみていくと，メンバーの補充は内部からのそれが最も有効であり，そのための努力が組織的に試みられる必要性は看過できないものがある。とくに，メンバーに対する結婚生活の承認と奨励は重要である。家族は潜在的メンバーをセクト共同体に持続的に供給するすぐれた源泉にほかならないからである。しかしながら，家族の意義と機能を評価するとしても，他方では，共同体に対する忠誠と家族に対するそれとをめぐる緊張が，場合によっては葛藤が生じるおそれもないわけではない。シェイカーズのごときはこの点を危惧しての独身主義採用であったともいわれている。

ともあれ，こうしたメンバーの内部補充にかなりの成功をおさめているのが，この小論で取上げんとする兄弟会（The Society of Brothers）である。このセクトでは，家族に対してきわめて高い価値と意義があたえられており，両親にはインフォーマルとはいえ，むしろ高い地位すらあたえられている。ま

た，家族を中心とする共同体レベルでの行事も多く実践されており，子供たちも家族との強い紐帯のうちに養育されると同時に，共同体との結合もその発達段階にともないながら組織的に進められ，家族と共同体とによる兄弟会のコミュナル・ライフへの社会化が効果的に機能しているすがたを観察することができる。そこでは，家族と共同体の双方に対する忠誠がいたって調和したかたちで均衡を保っている。

この小論においては，兄弟会の略史，コミュナル・ライフの実際，経済などを要約したのち、兄弟会にみられる子供の発達段階に応じての幼児から正規のメンバーにいたる社会化のプロセスを観察し，子供の社会化に際して家族および共同体が均衡を保ちつつ機能しているすがたを考察していく。主たる資料は，筆者が1981年ニューヨーク州リフトンに所在する兄弟会のウッドクレスト（Woodcrest）共同体に滞在，現地調査を行った際に得たものである。

1　略　史[3]

兄弟会はその創唱者アーノルド（Eberhard Arnold）が，1920年夏，ドイツ・ヘッセンのザンネルツ（Sannerz）に一農場を借上げ，共同生活を開始したことに，その公的端緒を求めることができる。発足当初は Bruderhof と呼ばれていた。

アーノルドは1883年ケーニヒスベルク（Königsberg）に，のちにブレスラウ大学で神学と教会史の教授となるアーノルド（Carl Franklin Arnold）の第3子として生まれた。その家庭はいたって穏健なキリスト教的雰囲気をもっていたが，かれはそれにあきたりず，貧民階級に関心を寄せたり，救世軍活動に参加したりしている。さらに，聖書研究を通してイエスの歩んだ道を学び，友人たちと世界の不義，道徳的頽廃から身を守るべく，ブレスラウで古い空屋敷を見出し，そこで共同生活を体験することもあったという。

ブレスラウ，ハレ，エルランゲンの各大学で哲学，神学，教育学を修めたのち，1907年アーノルドはエミー（Emmy）と結婚する。かれは最良の理解者をえて，キリスト教社会主義に関する講演と出版に精力をそそぎ，やがて，ドイ

ツ学生キリスト者運動の総主事となる。かれの関心はとりわけ第一次世界大戦後のドイツにおける荒廃と無秩序，戦争の悲惨な結末にあり，かれの周囲に集まった若者と山上の垂訓を中核とする新しい理念，新しい生活様式を探求したのである。他方，かれは16世紀の再洗礼派運動の研究に没頭し，成人洗礼と平和主義について強い確信をもつにいたる。すでに，かれは幼児洗礼と戦争肯定の主張を有する領邦教会（Landeskirche）の立場を脱皮していた。さらに，再洗礼派運動の研究は，やがてかれをして現存する再洗礼派の一群ハッタライト（Hutterites）との接触へと導びくのである。[4]

アーノルドの思想を端的に表現するとすれば，新約聖書の山上の垂訓の実践を中核とする急進的キリスト教ということができよう。第一次大戦による荒廃の只中にあって，平和と公正をもたらすのはキリストの福音，とりわけ山上の垂訓に表明された倫理にほかならず，かれはエルサレムにおける初期キリスト教会にこの倫理の最もすぐれた模範をみたのである。[5] 山上の垂訓を中核とするキリスト教的生活様式は，兄弟愛にもとづく共同生活（Community Life）でなければならない，との結論に達したからである。とくに，かれは私有財産制が戦争の，そしてあらゆる生活上の不公正，悪行の最大の根源であるとみたのであった。

この信念のもとに，かれはエルサレム教会を範とする自らの共同体創設へと努力を傾注するのである。ザンネルツ共同体発足当初から，山上の垂訓に表明されたイエスの説教，真理に対する信仰とその実現が共同体の本質であり，そのこと自体が共同体における生活体験の最も重要な表現となるべく求めている。かれにとり，山上の垂訓の精神を実践する唯一の方法がこの共同体生活にほかならず，人類のすべてが信仰と兄弟愛にもとづくこの一つの共同体にともに生活することこそ，真のキリスト教的生活様式なのである。かれは次のように述べている。[6]

ブルーダーホフの生活は今日の世界の不義と競争とに反対し，旧い秩序にあるすべてのあやまちと悪を拒否する生活である。いかなる階級，いかなる

国籍の男女にもドアは開かれており，したがって，兄弟愛にもとづく生活を求めるすべての者は加入することができるし，その生活を共有することができる。この平和と公正の生活の追求は，人々の間にある障害のすべてを打破し，初期キリスト教徒のごとくに，自己自身の財産をもつことなく，自己の必要に応じて物質的財を相互に共有することである。

ここで表明されているかれの思想は，むしろユートピア的セクトの色彩を示している。

ザンネルツでの数年ののち，メンバーの増大にともない，1926年共同体はレーン（Rhön）に移動する。この時期にアーノルドは再洗礼派のハッタライトが20世紀の今日にも存在している事実を知るのである。「われわれはハッタライト兄弟団の発見についてとくに熱狂した。それがわれわれ自身の発端とすべての点で対応しているからであり，われわれはその共同体生活の開始，教育方法，経済そして殉教者についての説明を読みふけった。われわれはこれらすべてのことに深い感動を覚えた。われわれが今の時代において，かれらと同じ証しのためにわれわれを招き給うた同じ神が，ここにいまし給うことを強く感じたからである」とエミーは記している。[7]

重い眼病に羅っていたにもかかわらず，アーノルドは直ちにアメリカ，カナダのハッタライト・コロニー訪問の旅に出発する。しかし，創設以来400年の歴史を有するハッタライトと新設ブルーダーホフの間には生活実践上の細目にわたり異なりが存していたが，相互の接触と対話はついに，ブルーダーホフをハッタライトの一員（Arnoldleut）として受入れることとなり，アーノルド自身ハッタライトの牧師（Diener des Wortes）に任命された。[8] とはいえ，両者の結合は必ずしも永続することなく，やがて破局を迎えることになる。

他方，ドイツではナチズムの抬頭にともない，ブルーダーホフは政府官憲の迫害・弾圧するところとなり，リヒテンシュタインのアルム（Alm）に逃避を余儀なくされる。まさにこうした時期に，アーノルドの健康が悪化し，1935年に他界したのである。かれの死はブルーダーホフに大打撃をあたえた。ナチ・

ドイツによる弾圧と国外脱出に加えて，カリスマ的指導者の急逝は内部にも大きな動揺をあたえた。集団指導体制を整えて，かれらはやがて英国に渡り，コツウォルド（Cotswold）オークセイ（Oaksay）に共同体を設立，順調に運動が展開するかにみえた。しかし，これも第二次世界大戦勃発を機に，英国から追放の浮目にあい，ハッタライトが存在するカナダに移住を希望するが受入れられず，南米のパラグアイが最終的にその移動先に選ばれた。

1941年からはじまるパラグアイ時代，とくにその初期は経済的にいちじるしい困難を体験している。今世紀初頭に入植していたメノナイト派(Mennonites)の一群がかれらを援助したとはいえ，亜熱帯の高地での営農は難渋をきわめ，衛生設備の悪さから多くの者が疾病に倒れ，とくに乳幼児の死亡が目立ったという。この地でかれらはプリマヴェラ（Primavera）など3つの共同体を設立し，製材，木工，酪農などに従事した。ハッタライトとの関係は依然続き，多額の援助も供与されたが，ドイツ学生運動に由来する喫煙，ダンス，演劇といったブルーダーホフ文化の細目の改善を要求するハッタライトとの確執は大きな溝となり，数度の接渉の結果，両者の結合は1950年に終りを告げた。[6]

ハッタライトとの破局はブルーダーホフに自由化と拡大への道を備えた。戦後間もなく，アメリカ合衆国との接触がはじめられて以来，かれらは除々に注目されるようになり，コミューン運動への関心の高まりによってかれらの伝道団は全米の大学，教会に歓迎され，やがては合衆国に共同体設立の気運さえ生じるにいたったのである。

1954年ブルーダーホフはニューヨーク州リフトンのウッドクレストに合衆国最初の共同体を設立した。この年はジョージア州のマセドニア共同体（Macedonia Community）から多くのメンバーが加入した年でもある。かれらの加入は有能な人材をもたらしたのみでなく，マセドニア共同体で営まれていた教育玩具製造も導入され、Community Playthings として展開されることでも重要である。これは今日でも兄弟会の代表的収入源であり，現在の繁栄の基礎となっているからである。拡大と成長は続き，1956年には9つの共同体が3つの大陸5つの国に存在したといわれる。伝統に固執して共同体を維持する，ウ

ィルソンの表現にしたがえば，内省主義的性格のハッタライト的理念は今や完全に消失し，アーノルドによるキリスト教的社会運動の一側面としての共同体理念が，新たに加入したアメリカ人メンバーによりもたらされた国際主義と功利主義に色づけされ，装いを新たに成長を続けたのである。1957年，ブルーダーホフの9つの共同体はプリマヴェラで世界会議を開催，急成長著るしいウッドクレストの優位が論じられるにいたり，それまで運動のセンターとみなされてきたプリマヴェラからウッドクレストへの移動が試みられ，最終的には1962年プリマヴェラは売却された。これにともなういくつかの共同体の閉鎖によりブルーダーホフはウッドクレスト，ペンシルバニア州のニュー・ミドウ・ラン (New Meddow Run)，コネチカット州のエバーグリーン (Evergreen)，それに英国のダーヴィル (Darvill) の4共同体を有することとなった。

ウッドクレストにおいてはアーノルドの2男ハインニ (Heinrich) を中心に，初期ブルーダーホフの精神に回帰すべく宗教的リバイバルが生じた。かれらはブルーダーホフがアーノルドの没後，いわゆるザンネルツ精神から大きく逸脱している事実を認識したのである。たしかに，ドイツを追放され，カリスマ的指導者を失い，英国にそしてパラグアイに生活していた時期には物質的にも経済的にも大きな困難を体験したとはいえ，このザンネルツ精神も共同体からかげをひそめてしまった。Community Playthings によってもたらされる安定と繁栄とともに，かれらは今一度自らを精神的宗教的に省りみる時をもちはじめたのである。[10]

何よりもかれらは兄弟会（この時期にはすでに Bruderhof から The Society of Brothers と英語名を使用している）を宗教共同体ないし教会共同体と規定するようになった。メンバーは共同体が宗教共同体，すなわち教会そのものであり，このことが一致した共同体生活を確立する最善かつ唯一の道であると確信した。アーノルド存命中はブルーダーホフは宗教共同体であると同時に一種の社会運動体でもあった。しかし，かれの没後，むしろ社会運動体としての性格が教会共同体という性格を犠牲にすることにより強調される傾向にあったが，この時点で，再度教会共同体の性格が復元されるにいたったのである。

この動きの一環として，ハッタライトとの関係の修復もまた試みられ，1964年ハインニはハッタライトの教役者会議に出席，個人的に釈明と現状説明を行い，和解の道を求めた。さらに，1974年には，かれは現在の4つの共同体の代表とともにカナダのマニトバで開催された教役者会議に再度列席，兄弟会として公式に謝罪し，和解を求め，両者の和解はここにようやく成立の運びとなった[11]。かくして，兄弟会はユートピア的セクトの色彩の濃い宗教的社会運動体から，むしろ，ハッタライトがそれである内省主義的といいうる性格に強くくまどられた閉鎖的セクトへと大きく脱皮していくのである。今日では，その正式名称として，The Hutterian Society of Brothers とハッタライトを冠した名を採用するにいたっている。

2　生活パターン

すでに述べたように，筆者は1981年11月ニューヨーク州リフトンにある兄弟会のウッドクレスト共同体に滞在する機会をえた。ウッドクレストは小高い丘陵地に建てられ，まさに「山の上にある町[12]」である。鬱蒼たる樺の林にかこまれた各所に，十数棟の建物が散在している。これらの建物にはそれぞれかれらの歴史に由来する名称が冠されている。ここに約60家族，メンバー250名，見習者と子供180名，計約430名が起居をともにしている。かれらはすでに合衆国国籍を取得しているが，その出身地はドイツ，イギリス，スイス，スェーデン，パラグアイ，そしてアメリカと様々であり，その宗教的背景もカトリック，クエーカー，メソジスト，ルター派など多岐にわたっている。

筆者はまず，イギリスで兄弟会に加入し，かつてクエーカーであったという家庭で茶菓の接待をうけたのち，カナダのハッタライト・コロニーに由来するスタージョン（Sturgeon）の名をもつ家屋のゲスト・ルームに案内された。全体的にあたたかい配慮と友好的な雰囲気が充満している。行きかう兄弟会の老若男女はすべて“Hellow！”と声をかけてくれる。子供たちもかなり人なつっこい感じである。筆者はここでかれらと生活をともにしたのである[13]。

まず，1日のスケジュールから述べることにしよう。具体的にいかなる生活

がここで展開されているか，を理解する一助となるだろう。ウッドクレストの1日は6時30分鐘楼の起床ベルからはじまる。8時の就労時間までに，各家族ごとにあるいは独身者グループで朝食がとられる。8時からほとんどのメンバーは定められた職場で労働に従事する。ただし，主婦と独身の当番女性は朝食の片付け，部屋の清掃のために9時よりの就労である。12時から1時まで昼食，その後に1時間の休憩をとる。2時から6時まで午後の労働に従事する。1時間の休憩（この間に入浴）ののち，7時から夕食がはじまる。食後8時からは種々の共同体レベルでの行事が計画されている。

このうちで最も主要な行事は，共同体の意志決定機関である Brotherhoodと呼ばれる会合である。1週に2度，時には連夜開催されるという。このことはのちにふれよう。筆者滞在中の主たる行事は次のごときが行なわれた。一つはかれらの子女が通学するキングストン（Kingston）の高等学校教師招待夕食会である。夕食の準備、Austeiler と呼ばれる食事係はすべて高校生が担当した。食後，かれらによるシェクスピア劇，ダンス，オーケストラ演奏が披露され，教師たちを歓迎した。教師は高校生の家族と一緒に席を占め，父母と談笑しながら時を過ごしていた。また，たまたま新生児が退院してくるということがあり，全員が子守歌をうたい，行列を作って新生児とその両親に祝福を送るという行事が行われた。クリスマスが近いためか，全員によるクリスマス用のコーラス“The Star of Bethlehem”の練習もこの時間に行なわれていた。

日旺日のスケジュールは若干異なる。この安息日には労働の一切は行なわれない。7時30分起床ベルでこの日ははじまり，家族別の朝食ののち，9時30分よりザンネルツにある大集会室にすべての者が出席して Family meeting が開かれる。ここでは兄弟会で創られた讃美歌がうたわれ，宗教的読物が朗読されるが，むしろ，その対象は子供たちと考えられ，日旺学校的性格をもつと思われる。30分の休憩をはさんで，10時30分より Household meeting がやはりザンネルツの大集会室で開催される。同じく全員の出席で，一般のキリスト教会の礼拝に擬することができる。讃美歌がうたわれ，説教がなされ，合衆国内の3つの共同体を電話回線で結んでの挨拶が交換される。

昼食ののち，夕食までの数時間は自由時間である。自らの住居で読書に編物にふける者，友人を訪問する者もあるが，大部分は共同体の，とりわけ居住区の背面にひろがる森を家族単位で散策する。子供の手をひいた若夫婦を多くみかける。中には子供を満載した馬車すらみかける。夕食は各家族別にとられ，普段の食事時間より長い。日旺の夜には Gemeinde Stunde という宗教的会合が開かれる。 Brotherhood よりも幾分か開放的であり，見習者（novice, novitiate）のみでなく，ティーンエイジの子供，時にはゲストの参加も許される。讃美歌，祈祷，聖書あるいはアーノルドの，または初期再洗礼派の著作が朗読される。

共同体においては，このような1日，1週がくり返されている。1日のスケジュールの大部分は共同体レベルの労働であり会合である。しかし，家族とともにすごす時間もかなり配慮されているといえる。

3 運営機構

1920年アーノルドがブルーダーホフを創設した際，その統制あるいは指導性のすべてはかれ自身の手中にあった。カリスマ的指導者としてのかれの存在は，ブルーダーホフに特別の地位と役割を有する指導者を他に求める必要はなかったし，集団の規模自体小さかった。しかし，かれの没後，この集団は数名の指導者による集団指導体制をとり続けてきたが，ウッドクレストに移ったのち，再度アーノルドに対する共同体の権威の根拠づけが行なわれ，いわば，カリマスの日常化への試みがなされている。と同時に，とりわけアメリカ人加入者が増加したことと相まって，かなりの民主的方法が取入れられてきている。

1960年代にアーノルドの2男ハインニの兄弟会における最高位が公に認められるにいたり， Vorsteher（メンバーはかれを Elder と呼ぶ）の称号があたえられた[12]。Vorsteher の地位はエバハルト以来であり，このことはハインニがエバハルトその人ではないにしても，その息子であり，かれの精神を継承し象徴する人物として，いわばエバハルトのカリスマ性が Vorsteher（Elder）という職制上の地位に内面化されたすがたをみることができよう。そして，か

れ自身に初期のザンネルツ精神による共同体統合のシンボルをみるのである。かれは兄弟会における宗教的，世俗的両側面にわたる最高指導者なのである。

教会共同体的性格を有するこの共同体において，宗教的と世俗的側面とを明確に峻別することは必ずしも当をえているとは思えないが，共同体におけるそれぞれの側面を主として担当し，共同体の円滑な運営と存続発展のために機能している役職群が構成されている。

宗教的側面での指導は Servant of Word（ハッタライトの Diener des Wortes に相当する）が担当する。ウッドクレストには4名の Servant が任命されている。かれらは Vorsteher を補佐し，洗礼式，結婚式，葬儀を司さどる。他教派における牧師（minister）とほぼ同一の領域の機能を遂行していると考えてもよいだろう。年に一度の聖餐式を執行するのも Servant である。聖餐は兄弟会生活の中でも最高の儀式であり，すべてのメンバーがパンとブドー酒をともに分ち，共同体の一致を確認する儀式である。したがって，共同体全体の一致が存しない限り，聖餐をもつことは許されないという。

新たに Servant of Word を選出する際には，この目的のための特別の Brotherhood が開かれる。この時には他の共同体からも出席者を求める。Servant の選出は兄弟会全体と関係があるからである。正規のメンバーのみがこの職制への候補者の指名に参加できるが，指名候補者のほとんどは後述する Witness Brothers である。指名された者は妻とともに退場しなければならず，その間に Brotherhood ではかれについて議論が交される。他の意志決定と同じく，Servant の選出においても全会一致が原則である。Servant に選出されると，6ケ月から2年の見習期間を経過したのちに正式に就任する。

世俗的生活側面と主に関る職制として，Steward，Head of department，Work distributor，House mother がある。Steward は共同体全体の収入，収支を統轄し，会計簿を記帳管理する。主要な経済，財政上の決定はのちにのべる Brotherhood において，あるいは Witness Brothers によっている。共同体で必要とされる物品はすべて大量に購入され，共同で使用されるか，または各家族，個人に分配される。Head of department は各職場セクションの

責任者であり，Work distributor とともに各職場での段どり，担当の割当てをする。

これら役職の中でも House mother の役割は重要である。かの女たちは Servant, Steward, Head of department の妻たちであり，現在4名任命されている。かれらは (1)調理場，洗濯場，衣服室，乳児所，保育所，小学校といった主として女性メンバー（見習者をふくむ）の部局での仕事の分担，割当て，(2)必要とする食料品，生活必需品の購入計画立案と実施，(3)衣類その他の生活物資の各家族，個人への分配，(4)住居の割当，家具の分配，ゲスト・ルームの準備，世話係の配置，(5)その他一般家庭でみられる主婦の役割を共同体レベルで配慮する。各メンバー，家族で必要とする品物があれば，この House mother に請求できるし，若き女性が結婚の意志を伝達するのもかの女たちに対してである。

さらに，兄弟会は民主的な共同体の意志決定の機関を有している。Brotherhood と呼ばれる全体会議がそれであるが，一般には週に2，3回，夕食後に開催される。これにはメンバーと一部メンバーに近いとみなされた見習者のみが出席する。重要な議案提出の場合はメンバーのみである。共同体に関するあらゆる決定はこの Brotherhood でなされる。役職者を選出し，共同体が円滑に作動するように努める。メンバー間に葛藤があればこれを解決するし，家族の他の共同体への移動もここで議する。見習者をメンバーとして受入れ，洗礼をみとめ，時としてメンバーを追放に処するのも Brotherhood である。決定は全員の一致した同意でなければならない。

しかしながら，共同体の意志決定は Brotherhood をはなれても多分に行なわれているようである。上にのべた各種の役職者たちはかれらの領域に関してある程度の決定権を有している。しかるに，より大きな責任を担っているのは，Witness Brothers と呼ばれる一群の人々である。Witness Brothers は Servant をはじめとする各種の役職者の中から，4，5名が Brotherhood で選出，任命されている。かれらの主たる任務は，兄弟会の理念ないし理論的フレームワークが現実の共同体の生活実践に具現されているかどうか，を確認

することにあるという。かれらは Brotherhood をはじめとする会合を何時，どのように開催するかを決定し，共同体の宗教的雰囲気を正しく保つべく努めなければならない。

Witness Brothers はさらに，他の共同体との関係（兄弟会の用語では "inter-hof"）の場面でも重要な役割を遂行する。いわば，かれらは共同体（hof）の代表者であり，全体会議に出席する。また，共同体内部に葛藤が生じれば，Brotherhood にそれが提起される以前に解決を試みるのもかれらの役割である。個人レベルの諸問題，宗教上の問題をもつ者はよく Witness Brothers を訪ずれる。メンバーや見習者が信仰についての問題，兄弟会の方針に関する問題，あるいは共同体の期待に対する同調についての疑念をもつ時には，むしろ Brothers を訪ずれ，その勧告に耳をかさなければならない。それはある意味では一種の告解（confession）であると同時に，個人にとって自らが兄弟会のメンバーとして正しい軌道にいるか否かを再確認するという目的をもっているといえよう。他方，Brothers は他と協調できない者，不安を感じている者などと個人的に接触し，かれらと問題が討論され，一般的な解決の方向が示唆される。とくに，Witness Brothers に任命されている Servant of Word が，宗教上の事柄について重い責任を担っていることはいうまでもないところである。

4 経 済

兄弟会においては，1920年の発足当初から，一切のものを共有にしている。加入者はすべての私財を共同体に差出したのであった。そして，食料，衣類，住居その他すべての物質的な必要とするものは共同体により支給されている。メンバーのすべては共同体の労働を分担し，指示された作業に従事する。短期間の訪問者，ゲストですら，指示された職場で労働しなければならない。もちろん，労働に対する報酬は支拂われない。ここにおいては，生産と消費という経済生活の両面でコミュナルだからである。

ウッドクレストの経済的基盤は，主として木工産業，すなわち教育玩具製造

工場の Community Playthings に依存している。すでにのべたように，1947年マセドニア共同体ではじめられていたが，そのメンバーが兄弟会に加入した1954年にウッドクレストに引継がれた。Community Playthings で生産される木製の教育玩具は上質で耐久性があり，広い市場を有している。数百に及ぶ製品を記載した美しいカタログを配布，郵便による注文で，出荷のために大型トラックが終始出入りしている。工場には成人男子の大半が就労し，各人はかなりの熟練度を示している。週47時間労働ではあるが，仕事の雰囲気はいたってのんびりした感じである。Head of department は仕事の分担を指示する程度で，とくに監督する様子もなく，かれ自身自らの分担を黙々と遂行している，といった具合である。むしろ，生産高よりも職場での調和と一致を求めているとの印象である。

第二の重要な収入源は書籍の出版と販売である。兄弟会が経営する The Plough Publishing House は4つの共同体に支店を有しているが，印刷・製本はニュー・ミドウ・ランで担当している。出版物はアーノルドや兄弟会の歴史に関するものが大半であり，再洗礼派の著作の出版もある。ハッタライトの信仰告白書である Rechenschaft の英訳 Confession of Faith もここの出版である。

この二つの収入源は，かれらにとり是非とも成功させねばならない産業である。というのは，ウッドクレストをふくむ4共同体の維持運営という最大目的に加えて，(1)兄弟会はその子供のほとんどを高校，大学に通学させるが，それらは共同体の外にあること，(2)多くの年齢集団はよく外部に旅行するし，時にはヨーロッパまで旅行することがあり，(3)兄弟会には寄付をしている団体がかなりあるなど，相当額の経費を必要としているからである。

農業もまた共同体経済にとり重要な部分を形成している。ウッドクレストには約20エーカーの農場があり，主に蔬菜を栽培している。生産物は共同体での消費をおよそまかないうる程度であり，野菜，果物が多く瓶詰や罐詰にして保存されている。小学校上級生が主にこの農場の耕作に当っているが，農繁期には全員でかれらを助ける。この農業は共同体経済にとり重要であるばかりか，

子供の教育にとっても大きな意義を有している。

共同体では食料の大部分を自給しているほか，ハッタライトからの贈物（パン用小麦，肉類，ハチミツなど）もあり，食料で相当額の支出を抑制している。このほか，たとえば燃料は工場からでる木片を紛状にして固めたものをボイラー用にするなど，創意工夫をこらして支出を抑えるのに努力を重ねている。さらに，衣服はすべて共同体で調達されている。大量の布地を仕入れ，衣服室で製縫され，修理もされる。かれらは衣服の価値は流行にあるのではなく，安価で良質であること，労働に適した清潔なものであることに関心を示している。このシステムは衣類の購入費節減に大きく資しているという。

次に消費面でのコミュナリズムをみよう。

住居は各家族数に応じた広さ，部屋数が供給される。もちろん，必要な家具（テーブル，椅子，食器および食器棚，ベッド，タンス，冷蔵庫など）がそなえられている。ウッドクレストには約10棟の居住家屋が建てられており，部屋の割当一切は House mother の責務である。家族用の住居には台所があり，簡単な炊事ができる仕組みになっている。

食事は3食ともに共同体により供給される。調理はすべて調理場で行なわれ，共同体の居住者は全員同一の食事をとる。朝食および日旺，水旺の夕食は各家族ごとにとるが，主婦が調理場にとりに行き，食前に台所で火を加える程度である。昼食は小学校上級生と成人は大食堂で，小学校下級生は学校でとる。夕食は大食堂である。家族単位で必要とするコーヒー，紅茶などの飲物，クッキーのたぐいも共同体から支給される。

5　社会化

兄弟会は子供の社会化に強い関心と意義を見出している。かれらの場合，必ずしも明確に閉鎖的集団とみなしえないが，外部からの加入者もさほど多いとは思えない。1950年代から60年代にかけて，つまり，兄弟会の合衆国移住前後にはかなりの加入者があったといわれているものの，昨今では，皆無ではないまでも，いたって僅少であるという。とすれば，当然のことながら，兄弟会の

存続はその子供たちが共同体のメンバーとして成長し，共同体の次世代を担うということに大きく依存しているというべきである。したがって，兄弟会の理念に沿って子供を養育すること，かれらを正規のメンバーに育成すること，つまり社会化は，兄弟会自体の最も重要な課題として全メンバーに課せられた責務である，ということができるであろう。

このように，共同体の責務において子供の社会化が行なわれるとすれば，家族はどのようなかたちでこれに関与するのであろうか。他方，兄弟会の理念にしたがえば，子供の養育に際しての最も重要な役割は父であり，母であるともいう。したがって，家族，両親そして共同体の果すべき役割ととるべき責任が，どのようなバランスをもって保たれているのかは注目に値する。乳幼児から正規のメンバーへ，というこの共同体にみられる社会化の具体的なすがたを観察していきたい。

(1) 乳児

ウッドクレスト共同体に医師が定住しているものの，出産はキングストンの病院でなされる。1週間ほどの病院でのケアー後に退院の運びとなるが，この時共同体はよろこび一色につつまれる。すでにのべたように，夕食後全員が新生児を歓迎する行列に参加する。共同体全体が新生児誕生のよろこびを共有している，との実感を経験する一時である。産児制限を拒否するかれらの出生率はかなり高く，1家族平均7，8名の子供数である。

新生児は生後6週間目より乳児所（Baby house）で日中をすごす。その間，母親は共同体の日常作業に従事する。乳児所では新生児組，1才児組，2才児組といった年齢集団に分たれて世話される。この際に一緒になる年齢集団は成長とともにつねに同じ集団を形成する。新生児，1才児は oneys と呼ばれ，4名に1名の，2才児（twoies）は7，8名に1名の保母がつく。保母の大部分は未婚女性であり，経験豊かな年配女性が監督する。保母が乳児とともに過す時間は，母親にとり子供とはなれていなければならない労働時間である。労働時間の合間や終了後，母親は乳児とともに自らの住居に帰り，授乳をする。ここでは母乳による養育が積極的に勧められており，可能な限り，それが実現

できるように取計られている。

(2) 幼児

およそ3年間乳児所ですごした幼児は，次に，3，4，5才児のための保育所（Pre-school）に入ることとなる。保育所は小学校舎の階下にあり，日当りのよい広い庭に面している。保育所の保母も乳児所と同じく未婚母性が主体であるが，ここでは読み，書き，算数の初歩と宗教教育がほどこされる。しかし，保育所での教育は，むしろ共同体に密着した情緒を涵養することにあるという。たとえば，保育所の子供はよく保母に連れられて，父母の働らく仕事場を訪れる。とりわけ，スナック・タイムであることが多い。父母は20分という短時間であっても，休憩時間を子供とともにすごすことができるし，子供は父母の仕事場で父母の仕事振りに接しながら，スナックを口にする。さらに，保母はしばしば幼児を居住区の背面にひろがる農場へ連れていき，農作業をしている学童の手伝いをさせる。

食事に関していえば，かれらは朝食は各自の住居で両親，兄姉とともにとるだけで，昼，夕食は保育所である。この期の幼児はまだ成人と一緒の共同食事（communal meat）を大食堂（Rhön）でとることは許されない。幼児はこのように折にふれて両親，兄姉の，さらには共同体の年長者の共同体生活に接触し，家族の枠組をこえた共同体レベルでの生活様式に早い段階から統合されていくのである。

(3) 小学校児童

満6才の9月になると，小学校に入学する。もちろん，小学校も共同体に設置されており，8年制である。ウッドクレストでは，ニューヨーク州のカリキュラムに準じた教科が教授されているが，性教育のみは取入れられていない。生徒数65名，5，6年と7，8年は合同のクラス編成である。教師は校長をふくめて9名，その他に時間講師数名が任命されている。教師は全員共同体のメンバーであり，同時に州の教員免許を取得している。この共同体には小学校教師以外にも相当数が免許を有しているというが，必ずしも教師に任命されているわけではない。

この小学校では，午前中に教科教育を終え，午後は種々の活動に当てられている。ここには種々の設備が充実しており，木工，製陶，金属加工などの工作室，多くの楽器を用意した音楽室，図書室があり，児童はそれぞれの個性と関心にしたがい，教師の指導をえて，あらゆる創作活動に従事して時を費すのである。農場もまた，児童ことに上級生の責任領域である。かれらにとり，農場はいわば野外教室であり，神の摂理を観察し体験する最高の場となっている。他の共同体の小学校との交流も盛んであり，校舎の廊下は絵画，創作品，作文などの陳列で飾られている。

児童は家族とともに朝食をすませて登校するが，3年生までは昼，夕食を学校でとって帰宅する。3年生以上は成人とともに昼食を大食堂でとり，夕食は学校ですませて帰宅する。かれらは作業を終えた両親とともに夕方の一時をすごす。6年生以上になると，昼，夕食ともに成人と一緒の共同食事である。大食堂でこれらの児童は父母兄姉とともに座を占める。かれらにとり，この共同食事への参加は成人世界への関与の第一歩として大きなよろこびであるという。

さらに，上級生男子は Community Playthings，女子は衣服室，洗濯室あるいは共同調理場といった共同体レベルの作業にも参加する。このように，児童が上級生になるにしたがって，食事と労働という2つの面で共同体との直接的関連がしだいに濃密になっていくすがたを明確に観察することができるし，児童の側でもかなりその方向へ適応している有様がうかがえるのである。

(4) 高校生

ウッドクレストに高等学校は設置されていない。理由は詳らかではないが，中，高等教育を否定するハッタライトとの関係と，独自の高校を設置するだけの生徒がいない，といったことがあげられる。ある説明は，外部の空気を知るために外の高校に通学させるという。高校生はキングストンの公立高校にバスで通学し，つねに一群となって行動しているという。かれらは一般高校生と異なり，女生徒は何らの化粧もすることなく，ハッタライト風の長いスカートに編んだ長髪であり，男生徒も派手な服装，長髪は1人だにいない。成績も平均

をかなり上廻っているという。

かれらは授業終了後直ちに共同体に帰ってくるので，課外活動，クラブ活動にはまったく参加しないという。共同体でなすべき事が多くあるからである。しかし，時折，たとえばクリスマスやダンス・パーティーのごとき特別な学校行事には参加するし，友人を共同体に招待したりまた訪問したりすることもないわけではない。1週のうち3日は下校後にかれらは共同体労働に従事しなければならない。分担はすでに決められており，たとえば Community Playthings の壁に分担表が貼り出されていた。他の2日は小学校校舎に用意されている高校生用の部屋で，コーラス，劇，オーケストラのごとき集団活動に費される。

高校生になると，昼，夕食は共同食事を成人とともにすることが許される。テーブルはほとんどの場合両親の傍らである。しかしながら、かれらはいまだ正規のメンバーでもなければ，メンバーの見習者の地位もあたえられていない。したがって，夕食後に開かれる諸会合に出席することはできない。この時間かれらは自宅でホーム・ワークをしたり，とくに女生徒の場合は会合に出席する家族のベビーシッティングを依頼されたりする。

アメリカの高校生一般が体験するような生活は，かれらにとり，むしろ放棄しなければならない類のものである。たとえば，部外者とのデートは厳禁されている。兄弟会の独身男女2名のみのデートも許されない。すべての社会活動は集団的でなければならず，個人的に愛の感情を，ましてや，結婚の可能性を語ることは，放棄さるべき主要な項目の一つである。この類の問題はすべて Witness Brothers あるいは House mother の手を通さねばならず，かれらが必要と認めれば，個人間の仲介をする。かかる愛情や結婚の問題は集団活動あるいは共同体レベルでのコンテキストの中で処理されなければならないのである。

(5)　大学生

高等学校卒業者の大半は，ニュー・ポルツまたはアルバニーにある2年制短大に，または4年制大学に進学する。アルバニーの場合には通学が困難であり，

共同体をはなれて共同生活を送り，週末には全員がウッドクレストに帰ってくる。大学の選択，専攻学科の決定は，個人に委ねられているという者と共同体の指示に従ったという者の双方があるが，いずれの事例も正しいようである。もちろん，学費その他必要経費は共同体が支弁する。現在，アルバニーの州立歯科大学の在学生がいるというが，ある青年は「かれのためにかなりの費用を共同体が負担している」と語っていた。

この共同体のメンバーの学歴は相当高いと思われる。学歴調査は不可能であったが，メンバーの１人は，年配者とくに1935年までのアーノルド時代に加入した者はすべて大学卒であるという。アーノルドがブルーダーホフ運動を学生キリスト者運動を母胎に創始した事実からすれば当然の帰結ともいえようが，この大学教育の重視は今日においても依然強く観察することができる。

他方，大学に進学しない者も若干存在するという。それは本人の意志で決定される。しかし，かれらもまた大学進学者と同じく，最底２年間共同体をはなれて外部社会での生活を経験しなければならない。就労場所は共同体所在地からさほど遠くないニュー・ポルツ，キングストンからアルバニーまでの範囲である。大学卒業者も１，２年の間外部で就労することがあるという。ともかく，かれらは最底２年共同体とはなれて外部社会での生活と体験するのである。といっても，完全に共同体との関係を絶って孤立した生活を学ぶのではなく，数名の者と共同生活を送り，週末にはウッドクレストに帰るといった程度の外部社会での生活である。

(6) 青年

２年間の外部社会での体験期間が満了すると，青年はウッドクレストに帰るか，それとも外部社会に残留し共同体とはなれての生活を送るか，の意志決定をしなければならない。共同体に帰れば，かれらはメンバーへの見習者（novitiate）とみなされる。共同体に帰らないのも自由だといわれるが，90%をこえる大多数は共同体に帰り，外部社会に残留する者は一握りであるにすぎない。しかし，共同体をはなれた者もよくウッドクレストを訪問するという。

共同体に帰ってくれば，共同体において指示された労働に従事することにな

る。その際に大学，短大で専攻した学科が直接生かされるとは限らない。本人の意志とは無関係に，Head of department, Work distributor, House mother の判断で適当にふり分けられるというのが真相である。しかし，そこにはまったく不平，不満はみられない[15]。また，これらの青年には独身者用の部屋があたえられ，家族とは別居する。若者たちは朝食を一緒にとるし，旅行などの集団活動をともにする。日旺の朝食，日，水旺の夕食は，家族のいる独身者は家族とともに,家族のいない独身者は指名された特定の家族とともにする。かくして，家族はすべての青年にとって帰属すべき unit とされる。

高校を卒えて結婚するまでの青年（18才から25才まで）の数は，ウッドクレストでおよそ100名ほどであり，かれらは「シャローム」（Shalom）というグループを形成している。このグループには大学に学ぶ者，外部社会で就労している者も加入している。とくに定例的行事をもっているわけではないが，時たま，旅行，リクリエーション，共同作業（たとえば最近では居住区の南方にある湖近くの小屋の改修）といった相互作用が立案されている。筆者が訪れた時はクリスマスが近いということで，コーラスの練習に励んでいた。

(7)　見習者

大学ないし外部社会における就労を終えて共同体に帰ってきた青年は，共同体の正規のメンバーとなるための前段階である見習者（novice, novitiate）の期間をすごさなければならない。かれらはまだメンバーシップこそあたえられていないが，共同体の各職場部局での重要な労働力である。見習者となるには，メンバー全員の前でおよそ次のごとき誓約をしなければならない。

1，神とキリストへの堅い信仰にもとづいた兄弟愛に満てる共同体での生活法が，神があなたを招き給う唯一の道であると確信するか。

2，あなたの生涯の終りにいたるまで，あなた自身，あなたの心身のすべて，あなたのもてるものをもって，このキリストの教会共同体の定めに服従するか。

3，あなたは自己を完全に放棄し，神，キリスト，そして兄弟姉妹のため

に仕える者となる心の備えができているか。

このような問がいくつか発せられるが[16]，それに対する回答はすべて「然り」でなくてはならない。

この見習者となるための誓約は Brotheshood で全メンバー出席の許に行なわれる。見習者の期間は個人差があり，1年から5年，平均すると4年位だという。共同体の諸活動へのコミットについてメンバーとりわけ役職者による評価がなされ，Brotherhood において一致した承認が得られるまで見習者の地位におかれる。見習者の中でもとくにメンバーに近いと評定された者には，メンバーのシンボルである銀製の open ring が男性の，head band が女性の見習者にあたえられる。かつてはメンバーのみにあたえられていたこの慣習は，ブルーダーホフの初期から存しており，ハッタライトとの密接な関係をもっていた一時期に廃止されたというが，ザンネルツ精神の再興とともに，最近再度制度化されている。

(8) 洗礼

Brotherhood で全メンバーによる万場一致の承認がえられると，見習者はいよいよ洗礼を受領して正規のメンバーに加えられる。洗礼は Servant of Word が執行するが，浸礼，滴礼のいずれかが用いられ，形式にはとらわれない。形式よりも内的信仰が問題であるという。洗礼に際してとくにカテキズム教育のごときは行なわれないが，洗礼に先立って，Servant はいくつかの事項を洗礼志願者が心に留めておくよう求めて読みあげる。次のごときである[17]。

1．洗礼はキリストの前に謙り，キリストにわが身を献げるしるしであること。

2．キリストの教会は罪の生活を絶ち切った信仰者，神の民による共同体である。われわれは真の服従を通して，この共同体すなわち霊的なノアの箱舟に入れられること。

3．他者のために教会共同体に加入すべきではない。夫のために妻が，妻

のために夫が，両親のために子が教会に加入すべきではない。それは砂上に楼閣を築くに等しく永続性をもちえない。岩の上に家を建てんとする者のみが神をよろこばせることができること。

4，すべての者は個人的所有を何一つ持ってはならない。初期キリスト教会において，すべての個人的所有を出しあい，共有にしたのと同じく，主とその教会にすべてのもの，すべてなしうることを献げなければならないこと。

この Servant of Word による訓戒を受入れた洗礼志願者は，メンバーの前でいよいよ洗礼をうける。洗礼に際して次のごとき質問をうける。回答はすべて「然り」でなければならない。[18]

1．あなたは福音に記され使徒により伝えられたイエス・キリストの教えが真理であり，真の生活の基であることを認めるか。そして，教会共同体が今日の世界におけるこの真理の生ける表現であることを認めるか。

2．あなたは父なる神，子なるキリスト，および聖霊を信ずると告白するか。

3．あなたはあなたが犯した罪を神が赦し給うよう教会が祈ることを切望するか。

4．あなたはこの洗礼に際しての約束において，あなた自身を無条件に神に献げることを望むか。

洗礼式が終ると，受洗者はもはや見習者の地位にはなく，共同体の正規のメンバーとしてのそれが公的にあたえられ，共同体のあらゆる活動，Brotherhood のごとき共同体の意志決定のための集会にも出席する資格がみとめられる。かれらはつねに銀製の open ring や head band をつけていなければならない。

(8) 結婚

洗礼は確かに地位ランクの上昇と関係するが，結婚は正規のメンバーとして

の地位にさらに今一つの地位をあたえる。兄弟会の既婚者，とくに子供をもつ両親は，しばしば集合的に“momies and daddies”とも呼ばれ，informalであるとはいえ，一つの社会的地位集団を形成している。この集団にはメンバーであっても未婚者，そして既婚者であっても子供のない者は除外されるというし，共同体のこの支配階級による意志決定や共同活動からも排除されることがあるという。この事実は，共同体における家族に対する高い評価を物語る一つの有力なエビデンスでもある。

結婚をのぞむ男女に対していくつかの規定が存している。第1に，配偶者の選択は兄弟会メンバーに限定されている。この宗教的内婚制は固く守られている。メンバー以外の者との婚姻が生じれば，かれ（かの女）はBrotherhoodの決定により追放されることになる。第2に，結婚が成立するに先立って，その両親がともにメンバーでなくてはならない。この規定は両親がすでにメンバーである場合には問題はない。しかし，本人のみがメンバーである場合には，共同体において指名された特定の家族の一員とみなされる。この事例には“adopt”なる語が用いられるが，我国でいわれるいわゆる「養子縁組」ではなく，特定家族とのとくに親密な関係，ないしはその家族に後見人的役割が課せられることを意味する。家族単位でなされる食事に際しては，独身者はこの家族の住居で一緒にとるのである。

第3の点も興味をひくところであるが，兄弟会では個人的デートや直接的プロポーズが厳禁されている。共同体の若者は乳幼児期から一つの年齢集団に組入れられ，男女ともに学び，課せられた労働に従事し，集団活動にも参加しており，相互に熟知しあった関係にある。こうしたかれらの間に，一種の恋愛感情が生じないとはおよそ考えられない。しかしながら，直接的方法で自らの意志を相手に伝達することは許されないのである。

結婚を願う若者は，男性はServant of Wordに，女性はHouse motherに自らの意志をまず告げる。多くの場合，かれらにしばらく待つように告げ，結婚についてどのように考えているかを質問し，観察をつづける。時が経過し依然若者が真剣に結婚をのぞんでいれば，Servantは再度House motherと

相談し，mother は女性にその旨を告げ，かの女の意志を確認する。若き2人の結婚を願う意志が確認されると，問題は Witness Brothers の間で討議される。ここでの承認がえられれば，Brotherhood の議題となり，最終的には Elder の認可をえて婚約が成立する。

このように，婚約成立にいたるプロセスは，当事者個人の意志に加えて，共同体の意志がかなり介入する。かれらにとり結婚は個人の問題ではなく，それ以上に共同体の出来事なのである。したがって，婚約したとはいえ，それは共同体レベルでの公的承認をえたということであり，婚約者同志がデートを楽しむといった個人的行為は固く慎まなければならない。時折，2人でかれらの両親の住居を訪問する程度であるという。

婚約期間は短いもので数週間から，時には数年も続くことすらあるという。Witness Brothers が決定した結婚式の日には全共同体あげて準備をし，祝宴に参加する。他の共同体からの列席者を加えたこの日には，ウッドクレスト全体がよろこびにつつまれるという。式は Servant of Word が司さどる。まず，教会，聖霊，神との結合が結婚による結びつきに優先することが語られたのち，「あなた方2人の結合よりも，教会共同体との結合がより大切であると信ずるか」「あなた方の結婚にとり，情緒による結合よりも信仰による結合がより大切であると信ずるか」との質問が発せられる[19]。かくて，結婚に際して教会共同体の一致が当事者の情緒的，さらには性的結合にまして重要であること，個人的レベルでなく共同体レベルでの結合がつねに優位を占めるべく計られること，そして結婚は神があたえた秘儀であることが訓戒される。

両者がこれらの質問に確信をもって答えられれば，結婚が成立する。兄弟会とおいては，いかなる事情があろうとも離婚は許されない。たとえ，それが兄弟会加入以前のことであっても，離婚経験者であれば再婚することは許されない。結婚式後，新郎新婦は他の共同体訪問というかたちをとる新婚旅行に出発する。かれらがウッドクレストに帰ってくるまでの数日間，House mother の指揮の許にかれらが住むべき住居が定められ，必要とする家具，食器が運びこまれ，飾りつけがなされる。同時に，各メンバーから贈られたプレゼントが

テーブルに並べられる。新夫婦は共同体に帰って来たその日から，共同体の日常的労働に参加するのである。

むすびにかえて

われわれはコミュナル・セクトが存立するために必要と思われるいくつかの要件のうち，とりわけ，その存続に不可欠といいうるメンバーの補充の問題を，セクト内部からの補充にいちじるしい成功を示している具体例として，ニューヨーク州リフトンに所在する兄弟会をとりあげて考察を進めてきた。

このセクト内部からのメンバー補充に大きく機能しているのが，他の何ものにもまして家族そのものであることは否定できないところである。しかしながら，家族を強調しすぎることにより，むしろ，共同体それ自体に対する忠誠が損われる危惧が一方で存する。つまり，家族か共同体かという忠誠の緊張関係の問題が生ずる。兄弟会においては，家族に対して高い価値づけをあたえ，その意義を充分に認識しながらも，共同体に対する忠誠が効果的に結実しているすぐれた事例である。そこには家族レベルと共同体レベルの双方で，子供の発達段階に即した有機的な社会化のシステムが作動している事実を観察することができる。要約すれば次のごとくにいうことができよう。

家族レベルに関していえば，(1)見習者の誓約をした独身青年を除き，家族は共同体提供の家族用住居で起居をともにする。(2)朝食および週に2度の夕食は家族単位でなされるし，共同食事の場面でも家族単位で食卓につく。(3)独身青年は家族とはなれて独身者用の部屋を供与されるとはいえ，家族とともに食事をする機会が多く用意されている。(4)家族を共同体に有しない独身青年には“adopt”さるべき特定家族が指名され，その家族の一員として親密な相互関係が保持される。(5)共同体レベルにおける諸会合も，Famlly meeting，Household meeting のごとき家族を中心とした会合が開催され，家族全員がともに出席する。こうした家族との強い紐帯のうちに，そして，父母兄姉の共同体活動への参加のすがたを目前にしかつ自らも年令に応じた活動に加わり，共同体に自己のアイデンティティをもちつつ，兄弟会の子供は成長していくのであ

る。

他方，共同体レベルにおいても，(1)きわめて早い時期から共同体活動に何らかのかたちで参与する。保育所幼児によるスナック・タイムの職場訪問はその好例である。(2)年令集団が形成され，相互作用とコミュニケーションを通して，コミュナル・ライフへの志向性を強化する。たとえ外部社会の大学に在籍し就労するとしても，その地で共同生活を営み，週末には共同体に帰ること，シャーロム・グループなどの集団活動により，一致と協調そして連帯の感覚をつねに育成することなどである。(3)年令とともに共同体レベルでの活動領域が拡大され，共同体における地位の上昇がみられる。すなわち，保育所，小学校で食事をとる下級生から農場や成人の職場で働らくことが許され，同時に共同食事にも参加できる上級生へ，そして高校生へ，見習者候補としての大学生，Brotherhood に出席がみとめられ，さらにはメンバーのシンボルである open ring と head band を許される見習者へ，ついで洗礼をうけた正規のメンバーと段階的に地位が上昇する。最終的には，宗教的内婚制をとるメンバー同志の結婚による新しい家族形成を通して，インフォーマルであるとはいえ，共同体における最高の社会的地位集団ともいえる“momies and daddies”の一員となることができる。かくして，兄弟会の共同体レベルでのあらゆる活動の主要な担い手となるのである。

いずれにせよ，上にのべたように，家族および共同体のバランスの保たれた社会化のプロセスを通して，90パーセントをこえるといわれる兄弟会の子供がメンバーとして育成され，補充されているのである。この社会化のシステムが正常かつ効果的に作動していく限り，兄弟会のメンバー補充は持続されるであろうし，その社会化（宗教的社会化とも呼びうる）は高く評価されなければならないであろう。

註

① 拙稿「コミュナル・セクトについて」『哲学年報』第38輯1979年

② Charles J. Erasmus, *In Search of the Common Good*, New York : The Free Press, 1977, p. 154 f.

③ 兄弟会の略史についての叙述に際して，兄弟会の経営になる The Plough Publishing House 出版の以下の文献を主に参照した。

Emmy Arnold, *Eberhard Arnold, A Testimony to Church Community from his Life and Writings.*

Eberhard and Emmy Arnold, *Seeking for the Kingdom of God, Origins of the Bruderhof Communities.*

Emmy Arnold, *Torches Togather, The Story of the Bruderhof Communities——their life togather, sharing all things in common.*

Eberhard Arnold, *Why we live in community.*

Heini and Annemarie Arnold, *Living in Community, A Way to True Brotherhood*

④ Emmy の記すところによれば，80名から100名をこす各種のグループの人々——青年運動，労働者，学生，無神論者，伝道者，クエーカーなど——が，かれらの許に参集したという。Emmy Arnold, *Eberhard Arnold*, p. 9, 22.

⑤ 使徒行伝 2 ：44—47, 4 ：32—35。

⑥ The Society of Brothers, *Ten Years of Community Living*, p. 19.

⑦ Emmy Arnold, *Torches Togather*, p. 115.

⑧ ハッタライト側のブルーダーホフに関する記録は，*Das Klein-Geschichte Buch* (Herausgegeben von A. T. F. Zieglschmid, Philadelphia : The Carl Schurz Memorial Foundation, Inc., 1947) の付録（S．654 以下）にみることができる。

⑨ John A. Hostetler, *Hutterite Society*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1974, p. 281,

Victor Peters, *All Things Common, The Hutterian Way of Life*, Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1965, p. 173 ff.

⑩ Eberhard and Emmy Arnold, *Seeking for the Kingdom of God*, p. 279.

⑪ J. A. Hostetler, *op. cit.*, p. 282.

⑫ マタイ，5 ：14

⑬ 筆者にあてがわれたゲスト・ルームのドアには "JOYFUL WELCOME, PROFESSOR NOBUO SAKAI" と美しいカラフルな装飾文字で記した紙片がはって

あった。

⑭ 兄弟会の調査をした Zablocki は Vorsteher を Bishop と訳している (Benjamin Zablocki, *The Joyful Community*, Chicago: The University of Chicago Press, 1981, p. 202.) が，筆者はかれらが Bishop でなく Elder と呼ぶと教えられた。

⑮ 見習者の地位にあるある少女は「大学で教育学を専攻し，教員免許状を取得したので小学校教師を志望していたが，洗濯場での仕事に割当てられた」という。「不平はない。共同体に服従を誓ったのだから」と。ある若者は大学で電気工学を専攻し，卒業後2年間アルバニーの電気会社に就労，その後ウッドクレストに帰り，現在は電気関係の仕事を分担しているという。かれの場合は，大学での専攻が生かされているむしろ稀な事例である。

⑯ かっては，ドイツ，イギリス，パラグアイあるいは兄弟会の共同体の存する場所に派遣され，教会共同体の必要に応じて用いられるそなえがあるか，との質問も発せられたというが，現在はない (B. Zablocki, *op. cit.*, p. 327)。

⑰ B. Zablocki, *op. cit.*, p. 328

⑱ B. Zablocki, *op. cit.* , p. 330

⑲ 結婚まもないあるインフォーマントによる。